

古墳出現前夜における丹後地域王権の「畿内」交渉  
－首長墓の供献土器－

高野 陽子

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 古墳出現前夜における丹後地域王権の「畿内」交渉 －首長墓の供献土器－

高野 陽子

## 1. はじめに

『魏志』倭人伝には、倭国において2世紀後半～末に「倭国乱」とされる大きな争乱があり、邪馬台国の卑弥呼の「共立」によって、この内乱がおさめられたと伝えられる。また、奈良県東南部を拠点とした初期ヤマト王権は、前方後円墳を表徴とした葬送儀礼を共有する各地域勢力の部族連合の政治的な結集によって成立し、なかでも吉備勢力が大きな役割を果たしたとされる<sup>(註1)</sup>。いわゆる倭国大乱とされる列島規模の争乱のなかから卑弥呼が「共立」される弥生時代後期末は、丹後に日本海側最大級の弥生墳丘墓である赤坂今井墳丘墓が築造される前後の時期である。丹後を中核とする近畿北部勢力と大和東南部を中心とする「畿内」中枢地域に成立した初期ヤマト王権との関係性について、小稿では、墳丘墓の動態と弥生後期末における北近畿系祭式土器の供献を手掛かりに、古墳出現前夜の地域間関係と丹後と「畿内」中枢地域の地域間交渉のルートを検討したい。

## 2. 北近畿の地域圏

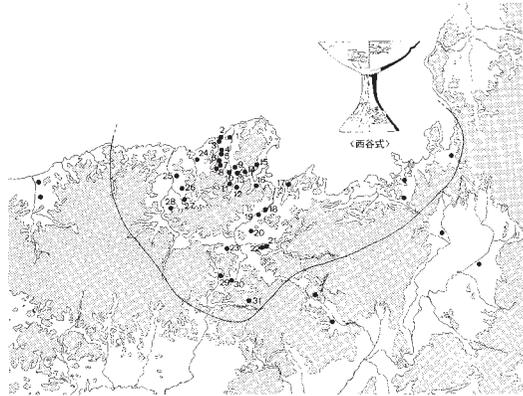
丹後を中心とする近畿北部系の擬凹線文系土器(以下、北近畿系土器とする)は、弥生時代後期後葉～末に大きく周辺地域に拡がり、但馬・若狭・北丹波・西丹波など隣接地域に影響を与え、丹後の西谷式<sup>(註2)</sup>を核とする大きな土器様式圏が形成される(第1図)。

周辺地域における丹後系土器様式の受容の在り方はそれぞれ異なっているが、まず但馬では丹後との関係性が深く、丹後と土器様式を各形式や手法に至るまで詳細な特徴を同じくする土器様相が後期を通じて展開している。但馬では、摂津・播磨を介した畿内系土器、瀬戸内系土器の影響がみられ、特に西谷式の最終段階には畿内系タタキ整形甕の比率が高まる傾向が窺え、北丹波と同様に近畿地方南部の影響が丹後よりも強くみられる。

北陸との境界域となる若狭は、西谷式の段階には北近畿系土器が基本組成を占めており、土器様式のうえでは北陸よりも北近畿の土器様相に近く、様式圏の東縁部を形成する。若狭では、近江系土器の影響を強く受けるため、擬凹線文土器と近江系土器との折衷土器が各段階に見られるなど複雑な土器様相を呈している。

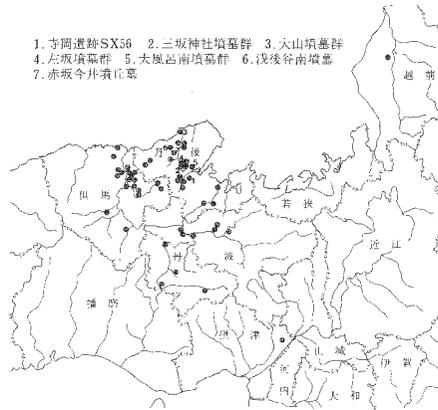
一方、篠山盆地を中心とする西丹波は、瀬戸内(太平洋側)と日本海側をつなぐ日本一低

いとされる分水嶺があり、地形起伏が少ないため、加古川と由良川をつなぐルートを通じ、瀬戸内海沿岸や近畿地方南部地域と密接な関係がみられる。遺跡の一例をあげれば、弥生時代後期末の数少ない集落遺跡の調査例である篠山市犬岡城遺跡の土器様相は、タタキ成形による畿内系甕との折衷的な形式がみられるもの



第1図 西谷式の様式圏(高野2006)

の、その基本組成は西谷式の範疇にある。しかしながら、同様に波及域の南縁を形成する南丹波の園部盆地や亀岡盆地では、南丹市今林遺跡や亀岡市北金岐遺跡など、北近畿系の土器群が一部に搬入されるが基本組成に影響を与えるには至らず、畿内南部中枢地域や近江の土器様式の影響を強く受けた土器様相を呈する。こうしたことから、丹後を中心とする西谷式の様式圏は、近畿地方南部



第2図 墓構内破碎土器供献の分布(肥後2000)

にむかっては、南丹波との様式境界よりも西丹波の加古川—由良川ルートに沿って、より南に下降する境界ラインを描くことになる(第1図)。

注目されるのは、こうした土器様式圏が土器にとどまらず、北近畿に特徴的な墳墓の土器供献儀礼であり、但馬の弥生墳墓の調査で提起された「墓壇内破碎土器供献」<sup>(注3)</sup>とも重なることであり、肥後弘幸はこうした葬送儀礼が近畿南部にも一部拡がることを明らかにしている<sup>(注4)</sup>(第2図)。弥生時代後期初頭の1世紀前半頃からはじまるこの伝統的な土器供献儀礼は、弥生時代後期を通じて後期末まで約200年近く続き、赤坂今井墳丘墓の築造時期がその最終段階となる。赤坂今井墳丘墓では、中心主体部の第1埋葬の内部主体は未調査で不明であるが、第4埋葬や周辺埋葬では埋葬にあたって同様の儀礼が行われており、後述する西谷3式の土器群が供献されている。弥生時代後期末の西谷式にみる土器様式圏は、供献土器儀礼などの習俗とも整合性をもつ点で重要であり、丹後を核とした北近畿を中心にした文化圏ともいべき地域圏が形成されると言える。弥生時代後期末の近畿地方南部

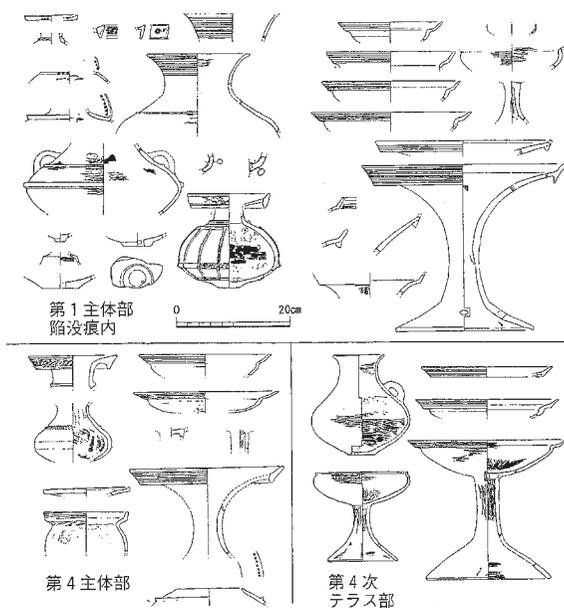
地域への北近畿系土器様式の拡がりや土器搬入は、赤坂今井墳丘墓に代表される弥生後期末における西谷式段階の地域勢力の伸長が背景にあると考えられる。

### 3. 赤坂今井墳丘墓の築造時期

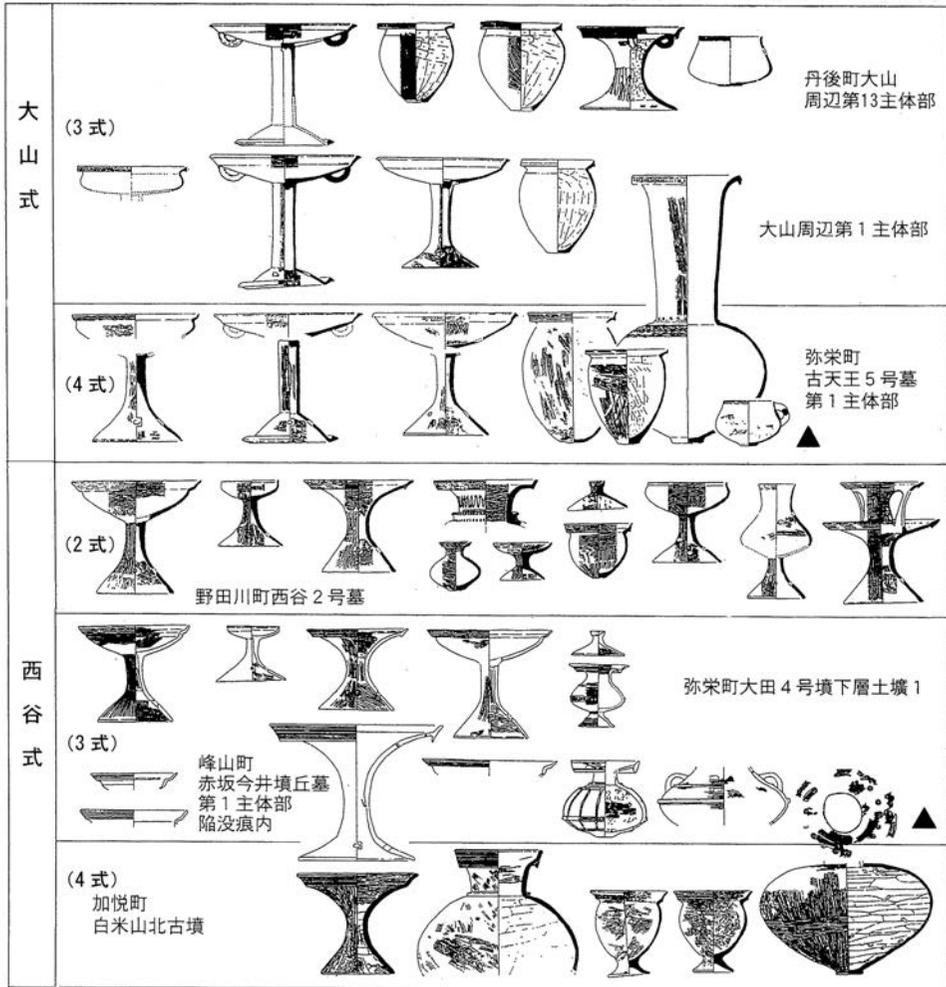
本節ではまず、赤坂今井墳丘墓出土土器の編年的な位置づけを明らかにしておきたい。筆者は、これまでに提示してきた丹後弥生後期土器群の編年作業において、日本海側の後期土器様式全体が、後期初頭の瀬戸内系土器の東方流入<sup>(注5)</sup>によって影響を受けた凹線文系土器様式と、凹線文系土器様式が在地で受容されて多様な土器形式が生み出される擬凹線文系土器様式に大別できるとしたうえで、後期前半期のうちに土器様式上の画期があることを明らかにした<sup>(注6)</sup>。丹後の後期土器様式について、凹線文系土器様式である三坂神社式、擬凹線文系土器様式である大山式、西谷式の3様式からなる変遷として提示し、それぞれの様式を小様式に細分し、三坂神社式を後期前葉に、大山式はおおよそ後期中葉に、西谷式は後期後葉～末に該当する土器様式としたものである<sup>(注7)</sup>。

弥生墳丘墓最大とされる墓壙規模をもつ赤坂今井墳丘墓の第1埋葬から出土した土器は、西谷式後半に位置づけられる土器群である(第3図)。西谷式は、精緻なミガキ技法による長脚高杯や、装飾壺や装飾器台などの祭器土器が盛行する段階であり、調整技法や整形技法など、後期土器様式のなかでもその到達点と言える土器様式である。

西谷式の細分案は、2006年に弥生後期から古墳時代初頭土器の編年のなかで提示したが、将来的に分離できる可能性を示した西谷1式・2式の新古を、それぞれ独立した小様式とする修正を<sup>(注8)</sup>変遷図によって示した<sup>(注9)</sup>。西谷1式古段階は暫定的に西谷式に先行するプレ西谷式としていたが、これを大山式の最終段階として追加し大山4式としている。長脚盤状高杯がなお組成の中心を占めていることを評価したものであり、古天王5号墓第1主体部出土土器を基準資料と



第3図 赤坂今井墳丘墓出土土器



第4図 墳墓出土供献土器の変遷

し、大風呂南1・2号墓出土土器などが該当する(第4図)。西谷1式は、新段階としていた京丹後市正垣遺跡出土資料が対応し、与謝野町犬石西古墳群などを加えるが未報告資料が多く、但馬の豊岡市妙楽寺墳墓群第8地点出土土器などがこれを補完する。西谷2式は、様式的に最も完成された与謝野町西谷墳墓群一括資料が基準資料となる。また、様式構造が変容する最初の段階として、その新段階としていた部分を独立した小様式である西谷3式としている。擬凹線文系有段口縁高杯に量量分化がみられる大田4号墳下層墳墓資料や外来系土器を含む赤坂今井墳丘墓出土資料がこれに該当する。さらに、西谷4式は擬凹線文土器様式の崩壊期であり、擬凹線文の多条化などに一部北陸系土器の影響をみる白米山北古墳出土資料や、参考資料ではあるが、同型式の台付鉢などを共有しつつ小形の擬凹線

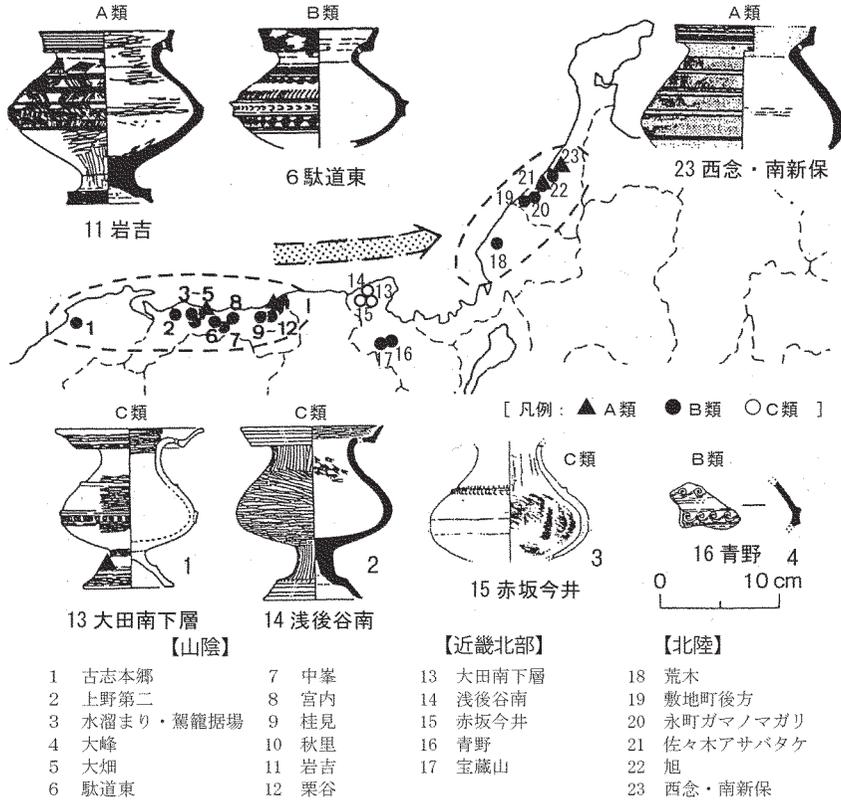
文系器台が出現する京丹後市三重遺跡出土資料を含める。

赤坂今井墳丘墓第1埋葬出土土器は、有段口縁高杯の法量分化が進む段階にあり、弥生時代後期末の西谷3式に位置づけられる土器群である。西谷式後半の土器群は近畿地方古墳出現期土器編年との併行関係が問題となるところであるが、この点については弥生後期土器と古式土師器をどのように区分するかという問題にも関わる。筆者は、古式土師器をいわゆる小形精製三種によって特徴づけられる小形祭式土器様式として位置づける視点から、「畿内」系あるいは東海系小形器台の出現を画期として、古墳時代初葉へと一部続く擬凹線文系土器様式と古式土師器の小形祭式土器様式を区分している。擬凹線文系土器が様式構造を維持したまま、庄内期古相に続く状況は、北陸月影式など日本海側地域に共有するものである。西谷3式段階の赤坂今井墳丘墓出土土器群は、擬凹線文系器台の小形化が進んでいない段階のものであり、器台の小形化は続く西谷4式の京丹後市三重遺跡出土資料ではじめて達成される。この段階の器台の小形化は、近畿南部における小形精製器種による小形祭式土器成立の影響を受けたことによるものとみるが、擬凹線文系土器の様式構造が保持された擬凹線文系器台の小形化であり、これに先行する赤坂今井墳丘墓第1埋葬の帰属する西谷3式は、弥生後期末～庄内期古相、庄内0～1式におおよそ対応すると推定する。隣接地域では、近江北部の高島市正伝寺南遺跡や長浜市桜内遺跡、同墓立遺跡など西谷式新相の有段口縁高杯が出土しており、共伴関係においても齟齬はない。

#### 4. 日本海沿岸地域の台付装飾壺と丹後系台付装飾壺の特色

弥生時代後期後半以降、日本海側では大形墳丘墓が相次いで築造されるようになるが、墳墓が大形化とともに、この時期には祭式土器にもあらたな器種が出現するなど、葬送儀礼で用いられる土器にも大きな変化が現れる。祭式土器の代表的なものは台付装飾壺であり、日本海側の各地で弥生時代後期後葉～末に盛行し、地域色がみられる土器である。筆者は日本海側における台付装飾壺の地域色について、山陰と北陸に共有される形態のもの(第5図A・B類)が広がる一方、丹後の台付装飾壺は異なる特徴をもち、日本海沿岸地域に地域色があることを明らかにしている<sup>(注10)</sup>。

台付装飾壺は、日本海沿岸地域では、山陰の因幡で形式的に最も古く位置づけられるものが出土している<sup>(注11)</sup>。後期中葉の鳥取市岩吉遺跡で出土している台付装飾壺は、筆者が装飾要素の分類からA類とするもので、算盤形の特徴ある体部に、横方向の沈線によって区画された文様帯を構成し、そのなかに二枚貝の腹縁を平行して数条を押圧したものを一単位とし、これを交互に向きを変えて施文した特徴ある文様を施すものである。後期中葉に出現したA類は、後期後葉～末には、一定方向に連続する簡略化した貝殻施文と、渦巻状の



第5図 日本海沿岸部の台付裝飾壺の分布

スタンプ文様を連続押圧した文様を組み合わせた裝飾性の高いB類へと変遷する。日本海側では後期中葉に山陰の伯耆を中心とする地域で生み出されたA類は、早い段階に北陸へ波及しており、さらに後期後葉～末にはB類へと変遷し、引き続き北陸の両地域に分布するようになる(第5図)。

丹後における台付裝飾壺の初現は、大山式最終段階の大山4式とする大風呂南1号墓に台付裝飾壺の脚部とみられる出土例があり、出現時期は山陰・北陸に大きく遅れず、弥生時代後期後半の早い段階に出現していると考えられる。しかしながら、その盛行期は、山陰東部と北陸が後期中葉後半～後期後葉を中心とするのに対し、丹後では西谷3式の赤坂今井墳丘墓の築造される弥生時代後期末の段階である。丹後で西谷式期に盛行する台付裝飾壺は、裝飾性では山陰・北陸と大きく特徴が異なり、体部は基本的に無文である。筆者は近畿北部でみられるこうした体部に施文をせず、突帯以外に裝飾を施さないものを台付裝飾壺C類として<sup>(注14)</sup>いる。C類には、体部突帯を持つものと持たないものがあり、前者には円形や半円形の竹管文あるいは爪形文が施されるものがみられるが、体部には施文されず、山陰東部や北陸でみられるものと大きく異なっている。貝殻施文やスタンプ文で加飾した

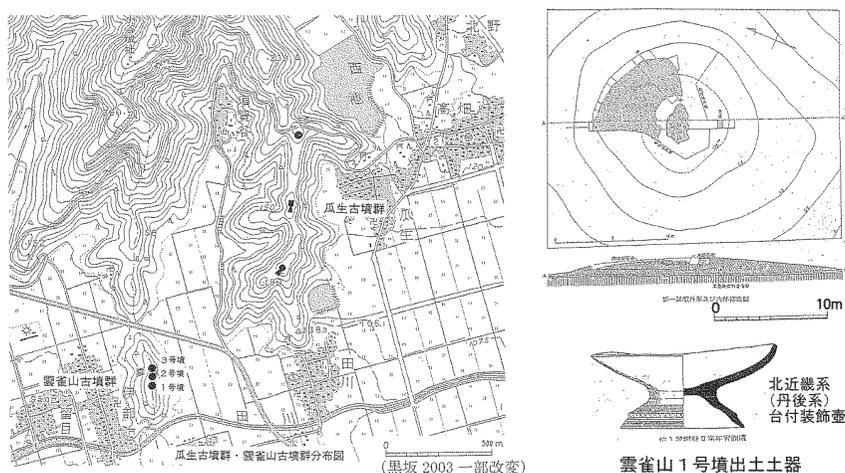
B類は、久美浜町橋詰遺跡や北丹波の綾部市青野遺跡などの丹後半島の周縁域では出土例があるが、丹後半島内部では確認されず、その分布はC類に限られ、強い独自性がみられる。

山陰東部で後期中葉に生成された台付裝飾壺は日本海沿岸域に広く分布し、山陰と北陸では体部加飾を基調とする後期中葉の台付裝飾壺A続いて後期後葉のBを共有するが、両地域に挟まれた中間地域の丹後ではこれらはみられず、体部無文の台付裝飾壺Cが盛行する。台付裝飾壺のこうした分布は、丹後を除く山陰と北陸で共有された墓制である四隅突出型墳丘墓の分布と類似したものであり、<sup>(注15)</sup>その背景には山陰東部と北陸の間には海路の交流を介した継続的で密接な人的交流や地域首長間の交流がある一方、両地域と丹後とは対時的な関係にあり、弥生時代後期後葉～末の日本海沿岸の地域間に緊張関係を生じていたことが推定される。

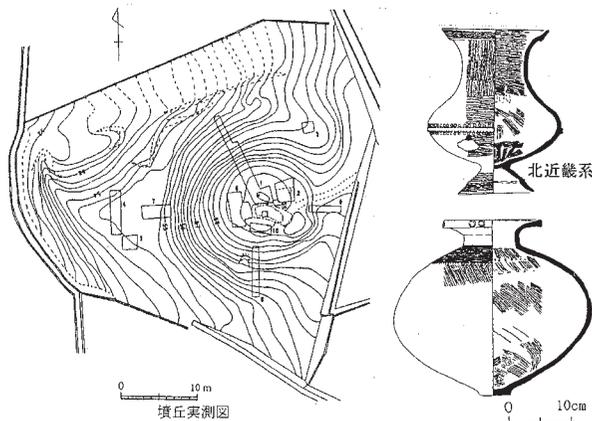
### 5. 弥生時代後期末～古墳時代初頭の北近畿系祭式土器の拡散

赤坂今井墳丘墓が築造された西谷3式期における台付裝飾壺は、丹後地域以外の墳墓で供献土器として出土する事例がある。このうちの一例は、滋賀県長浜市の雲雀山1号墳から出土した供献土器であり、他例は京都府木津川市に所在する砂原山墳丘墓から出土した供献土器である。いずれも地域首長墳とみられるものであり、弥生時代後期末～古墳時代初頭における赤坂今井墳丘墓を頂点とする近畿北部の地域勢力の「畿内」との関係性をみるうえできわめて重要な資料であり、以下に検証しておきたい。

まず、湖北の雲雀山1号墳は、長浜市伊部に所在する3基からなる古墳群のうちの1基であり、1953年に大阪市立大学による発掘調査がなされている。1号墳は径約25mの円墳であり、「山陰系土器」が出土したことが報告されている<sup>(注16)</sup>(第6図)。一方、2号墳は三



第6図 長浜市雲雀山1号墳と出土土器



第7図 木津川市砂原山墳丘墓と出土土器

角板皮綴短甲が出土し、中期古墳であることが判明しているため、雲雀山1号墳は弥生時代後期末～古墳時代初頭の単独墳と推定される。この墳墓の検討を行った黒坂秀樹は、「極めて特異な不定円形低墳丘墓」、あるいは「初期前葉前後の特異な円形古墳」とし、主体部は石組み構造の可能性が高く、墳丘中央部に礫層と薄

い粘土層で亀甲形に構築された部分があり、墳丘の一部にも礫層がみられることから、「擬似積石塚あるいはその類型」のような独特なものとしている。こうした墳丘構築法と内部構造は東部瀬戸内地域の影響の可能性が指摘される<sup>(注16)</sup>。古墳時代初頭における円形墓制と礫を多用する埋葬施設の出現について、筆者也近畿北部の事例について瀬戸内系墓制の影響を検証しており<sup>(注17)</sup>、雲雀山1号墳の評価について支持するものである。

雲雀山1号墳では、表土下約30cmの埋葬施設上とみられる位置で、鉄剣1と土器1片が出土している。この土器は「山陰系土器」とされ低脚高杯の可能性が指摘されるが、残存する体部と脚形態から台付装飾壺とみるべき資料である。体部は下膨れ状の形状を呈するとみられ、脚端部を薄く仕上げる手法は、西谷式後半の台付壺の特徴である。体部に装飾要素が認められないことから、前節で述べた台付装飾壺C類とみられる。湖北では、西谷式の有段口縁高杯が新旭町正伝寺南遺跡や彦根市桜内遺跡などで出土しているが、こうした首長墓においても丹後系の祭式土器が供献されていることから、弥生時代後期末から古墳時代初頭における両地域の首長間における密接な交流をみることができる。

つぎに、丹後と近畿地方南部の地域間関係を知ることのできる資料として、木津川市の砂原山墳丘墓の供献土器をあげる。砂原山墳丘墓は、大和盆地に近接する山城最南部の木津川南岸の丘陵上に位置する径約25mの規模に復元できる円形墳丘墓である(第7図)。弥生時代後期末～古墳時代初頭における山城で最大の墳丘墓であり、いわゆる奈良坂越えて大和盆地北部に至る古道に近く立地し、山城の地域勢力と大和の初期王権との関係性を検討するうえで重要な墳墓である。

出土した供献土器は、埋葬施設の陥没坑の可能性が高いとみられる楕円形状の土坑内から、畿内系広口壺と丹後系の台付装飾壺が出土しており、両者がセットで墓壙上に供献さ

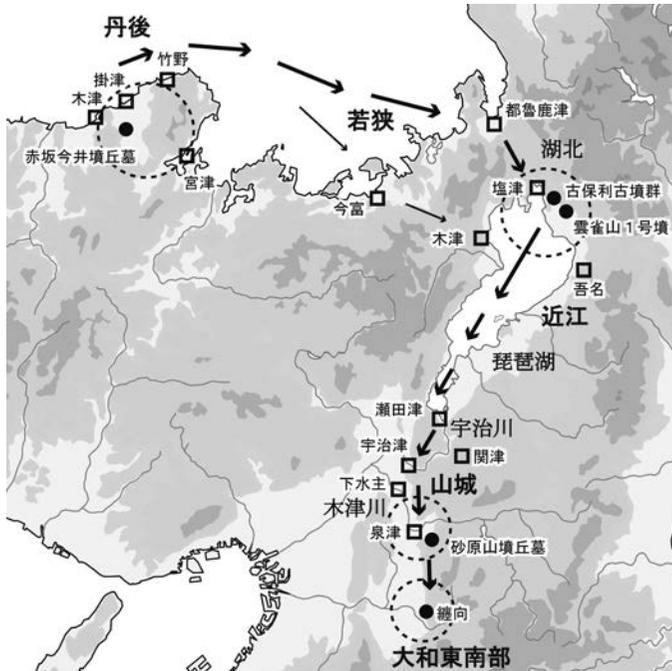
れたとみられる。台付装飾壺は、体部がワイングラス状の形態をなす点や、脚端部を薄く仕上げる特徴など、西谷式後半の丹後で出土する台付壺と変わらぬ特徴を備えるが、擬凹線文系土器の文様要素にはない口縁部の波状文や黄褐色系の色調など、やや異なる特徴もみられる。胎土・色調からも丹後の搬入土器とみることはできず、故地の形式を模倣して製作された土器であろう。この資料は、体部のシルエットや脚中実部を作り出さず脚端部を薄く仕上げる特徴から、赤坂今井墳丘墓が帰属する西谷3式におおよそ位置づけられるものであり、赤坂今井墳丘墓を頂点とする弥生時代後期末～古墳時代初頭の丹後地域王権「畿内」との交流の確実な接点を示す資料である<sup>(注19)</sup>。

砂原山墳丘墓の立地は、大和と山城を結ぶ木津川の河川交通の要衝に位置するだけでなく、のちに古墳時代前期前葉の椿井大塚山古墳を擁する初期ヤマト政権の重要な地域拠点にあり、丹後系祭式土器の供献は丹後地域王権と「畿内」中枢地域との婚姻関係などを背景とした密接な繋がりを示すものと考えられる。

## 6. 丹後地域王権による「畿内」中枢地域への交渉ルート

北近畿系土器の様式圏は、丹後を核として、但馬・北丹波・若狭、さらに西丹波へと拡がり、これらの地域では有段口縁の擬凹線文系土器群が共有される。前節で述べた台付装飾壺C類は、近畿北部のなかでもとくに弥生時代後期末(西谷式後半)の丹後を中心に分布する土器であり、近江北部と山城南部の地域首長墓に供献された2例は、赤坂今井墳丘墓に代表される弥生時代後期末～古墳時代初頭における丹後地域王権と、近江北部と「畿内」との首長間の地域間交渉を示すものと言える。

北近畿系土器の近畿南部への拡がりについては、由良川と加古川を結ぶルートから、南部へ下る摂津・播磨地域への波及と日本海地域と瀬戸内側を結ぶ摂津の交流拠点としての重要性を森岡秀人が指摘している<sup>(注20)</sup>。また、北近畿系土器の近畿南部への展開については、桐井理揮が摂津西部・播磨東部など大阪湾沿岸に北近畿系土器の分布が集中することを明らかにしており、後期後半に加古川下流域を避け、三田盆地から明石川、猪名川流域に至るルートが存在することを指摘している<sup>(注21)</sup>。大和における北近畿系土器の出土状況については、拙稿において纏向遺跡の出土資料を検討している<sup>(注22)</sup>。纏向遺跡東田大溝合流点下層資料には、報文では北陸系とされているが北近畿系有段口縁甕が含まれ、また同辻土坑3や同東田地区大溝(北部)資料にも口縁ナデ調整の北近畿系有段口縁甕が確認され、いずれも纏向1式後半から庄内2式までの庄内期前半の土器群と共伴する。大和の北近畿系土器の出土状況については、青木勘時・小池香津江らも纏向遺跡や天理市平等坊・岩室遺跡、奈良市三条遺跡などの資料を検討し、搬入時期が同様の時期であることを明らかにしている<sup>(注23)</sup>。



第8図 丹後と「畿内」中枢地域を結ぶ水上交通を利用した経路

纏向遺跡では、外来系土器のうち、東海系や吉備系は庄内期後半～布留期初葉に継続して搬入され、東部瀬戸内系や山陰系は庄内期後半以降に急激に増加するが、北近畿系土器の搬入時期はこれらと異なり、纏向1式後<sup>(注24)</sup>半を中心とする弥生時代後期末～庄内期前半に集中し、庄内期後半には希少となる。弥生時代後期末の丹後地域王権の頂点にある赤坂

今井墳丘墓の第一埋葬出土土器は、前述したように西谷3式に帰属し、おおよそ纏向1式後半、大和編年の庄内0～1式に併行し、大和の各遺跡で北近畿系土器が出土する時期とほぼ重なる。この時期は、丹後を核とする北近畿系土器の様式圏が最も拡がりを見せる時期であり、北近畿系土器の山城南部および大和への流入の背景に、弥生時代後期末～庄内期前半における丹後地域王権による「畿内」中枢地域との交渉・連携という、あらたに成立した政治的地域間関係があるものと考えられる。

丹後と大和との地域間交渉のルートを検証するうえで、重要な資料となるものが5節で述べた近江北部と山城南部における丹後系台付装飾壺の供献である。北近畿系土器のなかでも丹後に集中する体部無文の低脚台付装飾壺C類は、赤坂今井墳丘墓や大田4号墳下層墳墓の出土例に加え、赤坂今井墳丘墓に次ぐ墳丘規模をもつ浅後谷南1号墓でも赤彩された土器が出土し、弥生時代後期末～庄内期初葉の丹後の葬送儀礼のなかでもとくに重視された供献土器の中心器種である。こうした丹後系台付装飾壺が、近江北部の彦根市雲雀山1号墳や山城から大和への玄関口と言える木津川市砂原山古墳で出土していることは、古墳時代初頭前後の丹後地域王権が近江北部や山城南部を基盤とする地域首長層と密接な関係をもち、地域間交渉を行っていたことを示すものと考えられる。

丹後と山城・大和との交流ルートは、おもに土器研究の視点から、北丹波(福知山盆地)

を経て、篠山盆地からさらに南下し瀬戸内側に出て摂津から山城、あるいは摂津・北河内を経て大和に至る経路と、同じく篠山盆地から南丹波(園部・亀岡盆地)に入り山城北部から大和へ至る陸路を中心とする経路があると考えられてきた。近江北部と山城南部の首長墓における丹後系供献土器の出土は、従来考えられてきた丹後と近畿中枢地域との交流ルートのほか、弥生時代後期末～庄内期前半においては、湖北地域を介した、丹後と「畿内」中枢地域とを結ぶ経路が存在し、顕在化したことを示唆する。すなわち、丹後から若狭へ海路で入り、琵琶湖北部の余呉湾を囲む湖北から湖上交通によって瀬田に至り、宇治川を下ることによって、あるいは山科盆地を介することにより巨椋池東岸から山城盆地に達したのち、木津川を遡上して山城盆地南端の木津に至る経路である。海路から湖上交通へ、さらに河川交通へと水上交通をつなぎ、丹後から山城南部・大和へと至る最短の道であり、丹後と近江北部、山城南部の首長間の政治的連携によってはじめて可能となる、日本海側の丹後と「畿内」中枢地域を結び、直接的ともいえる交渉を可能とする道である。

近江北部は、従来から、長浜市桜内遺跡など弥生時代後葉～末の鉄器製作や青銅器製作に関わる遺跡が多いことで知られるが、近年、さらに彦根市稲葉遺跡が調査され、古墳時代初頭の大規模な鉄器生産に関わる遺跡の存在が確認されている。一方、山城南部でも京田辺市天神山遺跡において、弥生時代後期後葉から一部は古墳時代初頭に続く竪穴住居群から近畿中央部では例をみない量の鉄製品が出土しており、近年の再整理で鍛冶に関わる住居群であったことが判明している。こうした近江北部や山城南部における弥生時代後期後半以降の鉄器製作などの金属器生産もまた、同時期に列島内でも最大の鉄器副葬量を誇り、日本海交易によって高い技術力を保持した丹後との関係性をみるのが可能である。<sup>(注26)</sup> 丹後地域王権は、近江北部や山城南部の首長層と連携することによって、水上交通のあらたなルートを獲得し、「畿内」中枢地域との地域間交渉をなし得たものであり、初期ヤマト王権の成立に深く関わる勢力の一つとなったものとみることができよう。

(たかの・ようこ＝当調査研究センター調査課調査第2係長)

注1 近藤義郎・春成秀爾1967「埴輪の起原」『考古学研究』第13巻第1号 考古学研究会

注2 高野陽子2002「近畿北部の土器」『考古資料大観』2 小学館

注3 松井敬代1991「破碎土器の埋納について—豊岡市神美地域を中心として—」『但馬考古学』  
宮村良雄1992「豊岡の弥生墓と墓構内破碎土器供献」『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市教育委員会

注4 肥後弘幸1994「墓構内破碎土器供献」『みずほ』第12・13号 大和弥生文化の会

肥後弘幸2000「弥生王墓の誕生—北近畿における首長墓の変遷」『季刊考古学別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣

注5 河合忍2000「弥生時代中期後半における土器交流システムの変革とその背景」『石川考古学研究会誌』43 石川考古学研究会

- 注6 前掲注2  
高野陽子2004「丹後の後期土器様式と赤坂今井墳丘墓の土器」『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』  
峰山町教育委員会
- 注7 高野陽子2006「擬凹線文土器の様式と編年」『古式土師器の古代学』大阪府埋蔵文化財センター
- 注8 前掲注7
- 注9 高野陽子2015「2,3世紀の旦波と山陰」『大集結 邪馬台国時代のクニグニ』青垣出版
- 注10 高野陽子2000「弥生大形墳丘墓出現前夜の土器様相」『季刊考古学別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣
- 注11 松井潔1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会  
松井潔2004「土器にみる山陰東部における弥生時代中期後葉～後期中葉の域外交渉について」  
『弥生中期土器の併行関係』埋蔵文化財研究会  
松井潔2013「台付装飾壺」『みずほ別冊 弥生研究の群像』大和弥生文化の会
- 注12 谷口恭子1991『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団
- 注13 前掲注10
- 注14 高野陽子2007「タニハの土器をめぐる交流」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム』7 邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館2007
- 注15 前掲注10・14
- 注16 直木孝次郎他1953『大阪市立大学文学部歴史学教室紀要』第1冊 滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳群調査報告
- 注17 黒坂秀樹2003「湖北の王(1)」『北近江』創刊号 北近江古代史研究会
- 注18 高野陽子2006「出現期前方後円墳をめぐる2、3の問題」『京都府埋蔵文化財論集』第5集
- 注19 高野陽子2019「古墳出現前夜の丹後土器様式と地域間関係～赤坂今井墳丘墓の時代～」『旦波』第12号 丹波の文化を伝承する会  
肥後弘幸2021「弥生墳墓と初期前方後円墳」『季刊考古学別冊34 椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト政権—』雄山閣
- 注20 森岡秀人1999「摂津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究』XII 庄内式土器研究会
- 注21 桐井理揮2016「弥生時代後期における近畿北部系土器の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第7集  
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注22 前掲注14  
高野陽子 2011「旦波の土器交流」『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和』学生社
- 注23 青木勘時・小池香津江2007「北近畿系土器の動態—大和地域の出土資料を中心として—」  
『ふたかみ邪馬台国シンポジウム』7 邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 注24 石野博信・関川尚久1976『纏向』奈良県立橿原考古学研究所・桜井市教育委員会
- 注25 寺沢薫1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物発掘調査第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 注26 真鍋成史2017「金属器生産からみた木津川・淀川流域の弥生～古墳時代集落」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓に関する研究』同志社大学歴史資料館
- 注27 野島永2004『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣
- 参考文献  
石崎善久・岡林峰夫ほか 2004『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書 24 赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』峰山町教育委員会